杜城の花

郷土讀本

杜城の花

昭和五年一月二十五日印刷
昭和五年二月五日發行

杜城の花

不許複製

非賣品

編纂兼發行者　長崎縣南高來郡島原町　千百二十九番地　林銑吉

印刷者　長崎縣南高來郡島原町四百四十一番戸　清水治代

印刷所　仝縣仝郡仝町仝番戸　清水印刷所

序

頃日島原第一疊長林先生來つて稿本杜城の花を示す。就て看るに材を我郡の古今に取り、或は偉人烈士を傳し、或は地理風俗を述べ、或は口碑傳說を稽べ、行文亦流麗にして讀むに快し。

先生夙に公務忙雜の餘暇、心を郡史の研鑽に潛め、之れを正史に探り、之れを社寺舊家の藏書碑碣に求め、之れを故老博識に糺し、苦心慘憺缺を補ひ、誤りを正し、以て後昆に傳ふるの志あり。本書は實に其大業の餘沫にして、兒童少年も尙ほ能く解知し得べきものを擇み、誤傳を防ぎ、湮滅を守り、加ふるに讀過の裡、復自ら誨ふる所あらんとするの意に出でたるものにして、本書の梓業成りて世に行はれんか、先人は以て地下に會心の微笑をなすべく、後人は以て感奮興起すべし。

凡そ史を正すは人心を正すなり。方今の世態苟もすれば、外來の思想に陶醉し、國家を忘れ、國憲を紊るものあるは、識者の共に憂懼寒心する所にして、今日の時務人心を正しくするより急なるはなし。

而して其世の憂をなすの因は鄉土に愛なく、國史に晦きによる者尠からざるを見る。

惟ふに本書を繙く者、之れによつて、鄉土を知りて、愛鄉の念從つて湧き、之れを大にして國家を愛するの情に至るは亳も疑を容れざる所なり。

如斯んば本書の世道人心を皷舞し、國家に貢獻するところ蓋し甚だ大にして眞に時務に適したるものと稱すべく余の最も先生に敬意を表する所以なり。所感を記して序に代ふと云爾。

昭和四己巳仲秋

高嶼寓に於て

西金藏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序

一國一鄕の文化の由て來る處は色々の因緣もありましようが、主として其環境の沿革に伴ふ者であることは、自ら歷史の敎ふる處であり、隨て我日本に於ても、東北、關東、關西、中國、四國、九州と、其國々によりて、各人情風俗に相違の點あることを見出すことが出來ると思はれます。斯樣に見れば我島原の文化も亦其根本に於て秀麗なる山川風物の自然的資物であり、從て其內に古今を通して一貫したる何物かゞあることを相像されるのであります。然るに此の愛する鄕土に關しての歷史的研究なるものが、從來甚だ貧弱であつたことは、吾吾鄕人の最も遺憾とする處でありましたが、今回島原町第一尋常高等小學校々長林銑吉氏が、遠きは古文書を涉獵し、近きは古老に討ね、苟も兒童敎養の資料として適當なるものは、片言隻語と雖も漏らす處なく之を緝修して一卷となし、名つけて杜城の花と云ふ。一讀編者の努力を多とし、再讀半島の歷史を知り、且文化の由來する所以を明にするを得たるは、眞に感謝に堪へない

處であります。爾來本書により幸福を受くるもの獨り教育圏内の人のみに限らないと思ひます。

右は甚だ僭越と思ひましたが編著の御希望により、第一小學校保護會の一員として一言喜を陳べて發刊を祝します。

昭和四年九月

島原第一尋常高等小學校保護會々員

市川公也

自序

お國自慢はどこにもある。これほど純眞な誇らしい感情の現れはないと思ふ。お國自慢をもち得ない人は實に不幸な人である。めぐまれぬ人である。徒らに外來思想にあこがれて、祖國あることを忘れる樣な人は、多く鄉土的に、此の惠まれぬ人々の中に胚胎するのではあるまいか。吾等はなるべく多くのお國自慢をもちたいものである。又もたなければならぬ。それは吾等が鄉土を愛する眞情の叫びである。實に愛鄉心の表れがお國自慢なのである。この鄉土愛がだんだん成長して、やがて愛國心となるのではないか。然るに近來物質文明に禍せられて、此のお國自慢の材料が次第に破壞せられ、又自然に湮滅して行くといふことは、洵に忍び難い感じがする。鄉土といへば、無心の山河一木一草ですら、愛着の念が禁じ難いものであるのに、更に吾等の祖先が幾代か、その生命を注いで、築き上げてくれた、文化の跡をたづねる時、吾等の胸にはいひしれぬ懷慕の情がこみ上げて來て、之を鄉土の誇りとして高らかに禮讃せず

には居られないではないか。

郷土を愛し祖國を愛するの人々よ、吾等は祖先の後を繼いで、將來いやが上にも、お國自慢の材料を多くつくり出して、大いに之を他郷他國に誇らうではないか。

昭和四年八月

島原第一小學校内に於て　林　銑　吉識す

凡例

一、本書は主として兒童生徒の課外讀物に供せんがため、書いたものであるが、しかし又鄉人一般の鄉土的理解の一助にもなることがあつたならば、それは望外のしあはせである。

一、本書に載せてゐるものは總て我が鄉土に關係のある歷史的事實若くは口碑傳說等であつて、その歷史的事實に就ては、なるべく正確を期して、出來うるかぎり據る處を明かにした。口碑傳說に於ても根據あるものは之を調査して、從來誤り傳へられたものを匡すことにした。

一、本書編纂に當つて鄉土先覺諸賢の或は記錄圖繪等を提供せられ、或は直接說話せられて、後援の勞を惜まれなかつた事を特記して感謝の意を表する。

一、本書の印刷に當つて原稿の淨寫及び正誤若くは校訂の勞をとられた本校職員の援助を深謝する。

一、本書の爲め特に光榮感謝に堪へないのは、卷頭を飾るべく賜は

つた玉序である。記して以て深甚の謝意を表する。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

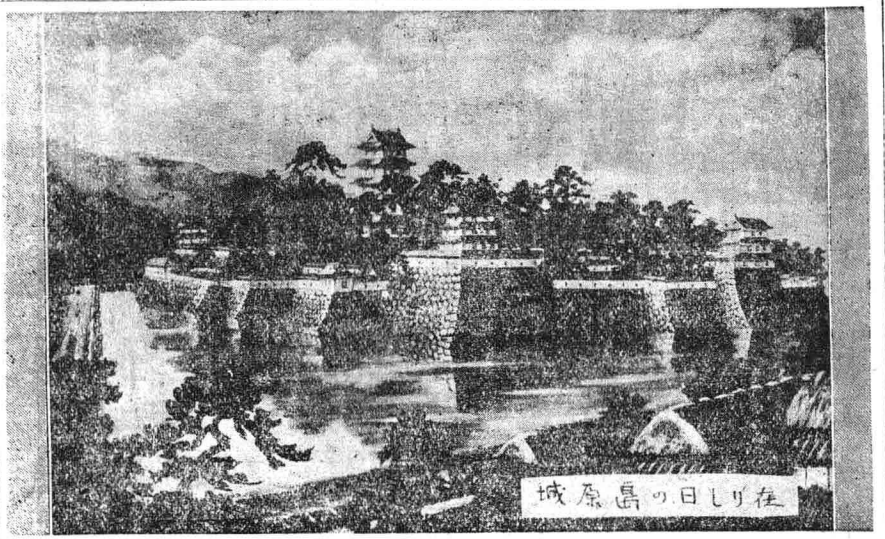
一　森岳城……一
二　郷土神猛島神社……五
三　沖田畷の戰……十
四　寛政の温泉岳噴火……十五
五　手毬歌……二十二
六　怪力川鍋次郎左衛門……三十
七　三十番神……三十六
八　大手門の戰……四十五
九　古代に於ける島原……五十一
一〇　奇僧桃水……五十三
一一　甚三郎山と志賀神社……五十八
一二　不思議な手水鉢……六十四
一三　三の丸大涛と星野善右衛門……六十八
一四　黑川御門……七十三
一五　原城の花……七十八
一六　島原の三勇士と强賊日本左衛門……八十三
一七　家忠公の最期と形見の槍……八十七
一八　風土記に見ゆる島原……九十一
一九　射術大和流と森川氏……九十八
二〇　尺八笛と松平好房公……百四
二一　寛政の津浪……百十
二二　新文化の輸入者市川泰朴……百十六
二三　兩國橋の卜占……百二十二
二四　島原藩の武道……百二十六
二五　勤王諸氏の述懷……百三十一
二六　高田伺庵と寛政の大變……百三十五
二七　島原藩の官職……百四十
二八　島原に於ける民謠……百四十五
二九　畫提灯丸山作樂……百四十八
三〇　御藥園跡……百五十二
三一　島原の勤王烈士と激烈組……百五十五
三二　島原藩の學者……百六十
三三　義商豊國屋と中山要右衛門……百六十六
三四　奥州征伐……百七十

森岳城

島原市街の西北に眉山の翠巒を背景として起伏する丘陵がある。これが我が森岳城趾である。こゝは初め四壁山又は森岳といつてゐた。

後水尾天皇の元和二年に德川秀忠が大和の國五條の城主松倉豐後守重政を封じて有馬氏の後を襲がしめたが、重政は有馬の原城を毀ち其の石壘を島原に移して森岳城を築いた。そして元和四年にここに移つたといふことである。今から(昭和四年)數ふれば實に三百十一年の昔に當る。

城郭は内外二重に分れて外郭は周りが一里程ある。周



圍に壘壁を繞らして、多くの櫓と七箇の城門とがあつた。東南の大手門、東北の諫早門（搦手）、東面の東不明門、先魁門、田町門、西面の西不明門、櫻門といふのがそれである。門内が所謂家中であつて歴々の面々が居住して居つた。内郭は周圍九町濠を繞らして本丸二の丸に分れ廊下橋を以て繋がれてあつた。二の丸の北に三の丸があつて別に

一郭をなし、藩廳及藩主の邸宅があつた。本丸には五層の天主閣が屹然として立ち古木老樹の木の間がくれに城壁若くは櫓の白壁がちら〳〵と見える有樣は實に壯觀であつた。

森岳城の築造者であつた松倉重政は耶蘇教信者を嚴刑に處して、專らその禁壓に努めた人である。又呂宋攻略の雄志を抱いて家臣吉岡九郎左衛門、木村權之亟をして彼地の狀況を偵察せしめ、そして家兵を率ゐて之を征せんことを請ふて允された。そこで弓、鐵砲各三千を用意して將に發せんとする時に病氣で死んだ。二代目重次の時に彼の島原の亂を引き起して遂に改易と

なつた。これが寛永十五年の事である。

次にこの城主となつたのが高力攝津守忠房で、戰後の經營に隨分苦心したものであつたが、二代目隆長が暗愚の爲め寛文八年遂に又改易になつた。

寛文九年入つて此の城主となつたのが松平主殿頭忠房侯である。爾來仁政を布くこと四代八十年寛延二年忠祇侯の時宇都宮に移つて、宇都宮から戸田能登守忠辰が來てこの城主となつた。然るに宇都宮に居ること二十五年忠祇侯の子忠恕侯の時再び島原に來て此の城主となり、戸田氏は忠辰の子忠寛が宇都宮に歸つた。その後松平氏の城主たること八代九十六年に及んで

廢藩置縣になつたのである。

今や築城茲に三百餘年纔に城壁鴻濠を存するのみではあるが、幾多の歷史を物語る好箇の記念物ではないか。

（藩翰譜、原城記事、大日本人名辭書）

鄉土神猛島神社

我等が鄉土の鎭守の神が卽ち猛島神社である。我等が生れて三十一日もしくは三十三日目にお宮參りをしたのが此の猛島神社である。先祖代々の產土神で、親も子も孫も皆こゝへお宮參りをして、そのお祭に遊んで大きくなつたのである。こう思ふとき我等は言ひ知れ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com